飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1989年度，飛鳥藤原宮跡発掘調査部では，飛鳥地域において山田寺・飛鳥寺・奥山久米寺跡・推定山田道など８件の調査を実施した（15頁表参照）。以下に主な調査の概要を報告する。

１．山田寺第７次調査

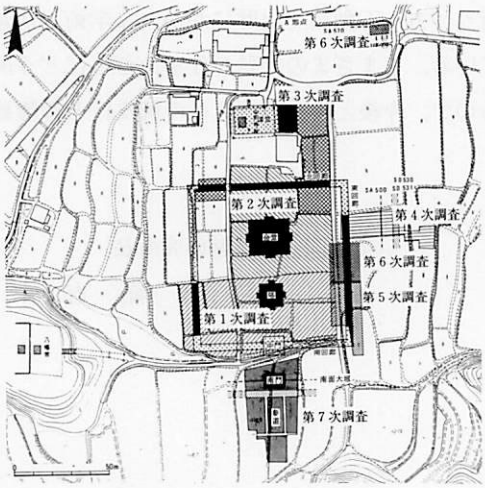
山田寺は1976年以来６次の調査によって，伽藍配置や各堂塔の規模・構造などが明らかになっている。今回は南門の位置と構造，南門の南側の利用情況，寺域の規模などの解明を目的として調査を行った。調査面積は1150㎡である。以下，主要な遺構について述べる。

南門造営前の遺構　東西方向の掘立柱塀 SA600・615・621・624，東西溝 SD601・609，斜行溝 SD607等がある。

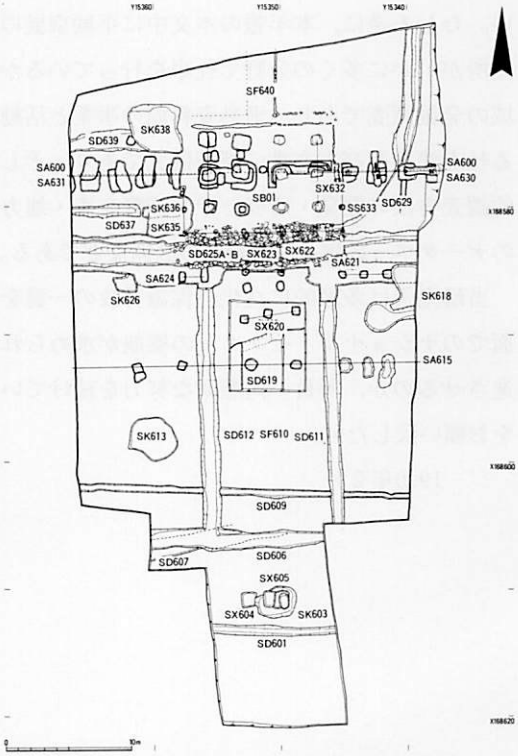
SA600は南門造営前に寺域の南を閉塞する塀で，後の南門の棟通りに揃えて12間分検出した。柱堀形は一辺1.6ｍ前後，深さ1.65～1.9ｍで，柱位置に平石の礎盤をすえた例もある。柱間寸法は南門と重複する５間分を除いた東西では約2.35ｍ等間であり，中軸線上の１間は約2.9ｍ，その東西のそれぞれ２間分は約2.6ｍと他より柱間が広くなる。この中央部分を通路として使用したものと考えられる。

東西塀 SA615は SA600の南14.8ｍで５間分検出した。柱堀形は不整形で，柱間寸法も3.5～5.4ｍと不揃いである。

南門造営後の遺構　南門 SB01，東西塀 SA630・631，暗渠 SX632，足場穴 SS633，参道 SF610・640，東西溝 SD625，橋脚 SX622・



山田寺調査位置図（１：4000）



山田寺第７次調査遺構配置図

623等がある。

南門SB01は西半分が削平されていたが，桁行3間・梁行2間の東西棟の礎石建ち建物である。柱間寸法は桁行2.92m，梁行2.62mの等間である。礎石は整地土を若干掘りくぼめ，根石を用いずに据え，厚さ15cmほど基壇土を積みたし基壇を築成する。南面の礎石だけには円形の柱座を造り出し，棟通りの礎石には扉の軸を受ける軸摺穴（径約12cm，深さ5～6.7cm）があり，棟通りの3間全てに扉が設置される。基壇は榛原石の板石や花崗岩玉石を並べた簡単な造りで，東西11.65m，南北7.84m，礎石上面までの高さは南で0.5m，北で0.1mである。基壇の南面は玉石敷の犬走り，北面は玉石の縁石の内側に瓦を乱雑に敷いた犬走りがあるが，いずれも奈良時代の改修と考えられる。南門造営時の足場穴SS633は棟通りより南で検出した。

南門に取り付く掘立柱塀は東（SA630）で4間分，西（SA631）で5間分を検出した。径30cmの柱根が2本残り，柱間は2.35m等間である。SA600の柱を溝状に抜いた抜取り穴を利用して，より浅い位置に柱を据える。柱の下には瓦を敷き詰めて，さらに柱に刳込みをいれ，南北から副木を添え，不等沈下やねじれを防いでいる。SA631の柱はすべて抜き取られているが，いずれの抜取穴も瓦を敷きながら版築状に埋戻される。このことは塀の廃絶後に築地に改造されたことを想定させる。暗渠SX632はSA630が門に取り付く部分で検出した。側石として榛原石や塼を用い，塀の柱筋にのみ榛原石の蓋をする。南北1.5m，内法幅0.25～0.32m，深さ0.2mである。

東西溝SD625は南門のすぐ南にある当地区の基幹排水路で，当初は幅2.5～3.75m，深さ1.0mの素掘り溝で(A)，奈良時代に南門の基壇幅に合わせて両岸を石で護岸するようになる(B)。SD625Aの幅は参道の東側溝の東と西側溝の西では他の部分より若干広くなる。鞴羽口・銅滓とともに飛鳥Ⅳの土器を出土した土坑SK626を掘り込んでいるため，掘削時期は天武朝と考えられる。SD625Bの石組部分は幅1.3m，深さ0.9m前後である。堆積土には砂礫を含み，相当の水量があったことを窺わせる。多量の瓦塼類や奈良・平安時代の土器が出土した。

参道SF610は素掘りの東側溝SD611と西側溝SD612を伴い，南から南門に至る。路面幅8.6m，溝心々距離約10mで，南門の正面規模に合わせる。両側溝はSD625から溢れた水を南に流し，東西溝SD606と合流して西流する。SD612からは鞴羽口・坩堝・鉄滓とともに奈良時代中頃の土器が出土しており，SD625Bの時期には埋没していたものと考えられる。

橋脚SX622・623は各々SD625A・Bの時期に南門中央の柱間に合わせて架けられる。SX622は溝肩で検出し，桁行1間，梁間1間で，柱間は南北2.95m，東西2.85mである。SX623は石組溝内にあり，柱間は東西2間（1.3m等間），南北1間（1.1m）である。橋脚は東南隅が円柱で，他は一辺0.2m前後の角柱である。

SF640は南門から中門へ至る幅約2.2mの参道で，玉石を並べた東縁石の一部を検出した。

SK603は東西溝SD606の南約3mにある不整形の土坑で，東西3.3m，南北2.4m，深さ0.7mである。SX604は正方形の柱穴で，一辺1.2m，深さ約1.2m。内部に柱抜取り穴がある。SK603と重複関係があり，SK603より古い。SK605はSK603を掘り下げて検出した。内部に1.2mの間

隔で東西に並ぶ2箇の穴を有する柱穴で，2箇の穴は柱抜取り穴と考えられる。幢幡の竿を建てたものであろう。掘方は東西2.1m，南北1.5m，深さ0.7mである。

斜行溝SD629は調査区東北隅からSD625Bに流入する幅4m前後の流路である。SD629からは回廊所用の双胴の鴟尾を含む大量な瓦，地覆石に使用された榛原石の切石などが出土し，相当な水量であったことを示す。出土土器には10世紀後半のものが含まれ，南門の廃絶時期を示す資料となる。

整地土下の遺構　南門南の参道の断ち割り調査でSD619とSX620を検出した。SD619は丘陵裾部の谷地形の流路で，北肩のみを検出した。幅5m以上，北肩からの深さは約1.6mで，上方の1.2mは整地土で埋められ，下半の0.4mに堆積層が2層残る。上層は茶褐色有機土層，下層は暗灰色粘質土層で，両層から木簡・飛鳥Ⅰの土器・木製品・木片・獣骨・二枚貝等が出土した。SX620は東西に並ぶ柱穴で，柱堀形は一辺約0.6m，深さ0.6m，柱間は東2.3m，西1.9mである。

遺物　多量の瓦塼類の他に木製品・木簡・金属製品（飾金具・鉄釘）・銭貨（和同開珎・延喜通寶・貞観永寶）・土器・土製品（土馬）・石製品（砥石）が出土した。

瓦塼類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・垂木先瓦・鴟尾・鬼瓦・面戸瓦のほか，塼仏も1点出土した。軒丸瓦はいずれも「山田寺式」で，従来細分しているA～Fの6種すべてが出土したが，Dが最も多く7割を越える。Dは回廊・中門の所用軒丸瓦と推定されており，南門の所用軒丸瓦もDとみてよい。軒平瓦はすべて重弧文で，1点を除きすべて4重弧文である。この中には，側縁をL字形に折り曲げた隅軒平瓦もある。垂木先瓦はD・B 2種が南門の主要垂木先瓦と考えられる。垂木先瓦は彩色されることが判明し，裏面を除く全面に白土を塗った後に，弁の輪郭線内側を赤色の顔料で縁どり，さらに間弁を黒く塗る。鴟尾は4個体以上出土しているが，互いに直角につながる2つの胴部をもったものがある。これは2つの胴部と1つの腹部・鰭部を備えた「双胴単尾」の鴟尾と考えられ，回廊の四隅を飾った鴟尾であろう。

木製品・金属製品はSD619の堆積層・造営に関わる整地土・SD625B・SK635から出土した。SD619からは曲物側板・鹿角柄刀子・部材（脚）等，整地土から琴柱，SD625からは曲物底板が出土した。SK635からは雲形の厚板に黒漆を施す，扁額の可能性のある木片も出土している。

造営に関わる整地土やSD619堆積層の出土土器は，いずれも従来の飛鳥地域の土器編年の飛鳥Ⅰの様相を示すが，さらに細分される余地がある。SD625Bからは奈良時代後半の土師器皿の底部外面に「山田寺」と墨書した土器が出土し，寺名を証明する資料として注目される。

木簡は整地層下で検出した自然流路SD619の北肩から，49点（うち削屑43点）出土したが，すべて習書木簡である。

まとめ　今回検出した南門は天武朝に建立され，10世紀後半から11世紀前半に廃絶したものと推定できる。南門の検出により塀で囲まれた寺域が判明し，南北規模は約185m，東西規模は東限の南北塀SA500を伽藍中軸線で折り返すと約118.4mとなる。南門と中門の心々距離は18.5mで飛鳥寺に近い数値となる。南門礎石上面は塔四天柱礎石より2.4m低い。南門は単層切妻造の

礎石建ち建物で，棟通りの柱間全てが扉となる「三間三戸」の形式であることが判明し，古代の寺院では類例がなく注目される。

礎石建ちの南門の前身施設として掘立柱塀の存在を確認した。金堂・回廊の建立された皇極朝には外周には塀だけが巡っていたと考えられる。南門地区では［掘立柱塀］→［礎石建ち南門と掘立柱塀］→［礎石建ち南門と築地］という三時期の変遷が考えられるようになった。南門の前身施設が掘立柱塀である要因としては，願主である蘇我倉山田石川麻呂の事件や山田寺近辺に推定される山田道からの出入りが西門で行われたことなどが考えられよう。

造営に伴う整地土下では柱穴とSD619を検出し，SD619からは木簡が出土した。これらの遺構・遺物は山田寺造営（641年）以前の時期のものである。木簡の出土から，これらは単なる集落とは考えがたい。山田寺建立の願主である蘇我倉山田石川麻呂の邸宅「山田家」の一画である可能性があり，その手がかりを得たことは意義深い。また，伴出土器はいずれも飛鳥Ⅰの様相を示しており，飛鳥Ⅰの年代の下限を示す資料としても興味深いものである。

2．飛鳥寺の調査

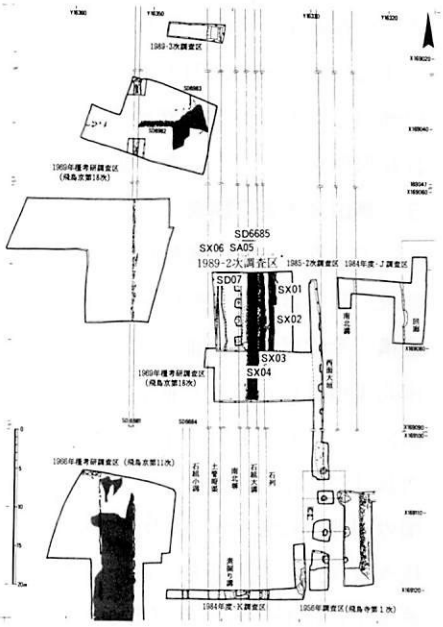
飛鳥寺の調査は5ケ所で行ったが，主要なものは1989－2次調査である。この調査は史跡飛鳥寺跡の現状変更に伴う事前調査として行い，調査面積は100㎡である。調査地は飛鳥寺西門の北30ｍの位置で，調査地の隣接地は1969年の奈良県教育委員会による飛鳥京跡第18次調査が行われ，調査区の中央部にSD6885が検出されている。

調査地周辺の飛鳥寺西辺部では，当研究所・県教委による数次の調査が行われ，掘立柱塀・石組溝・石敷広場などが確認されており，飛鳥寺と一体となった宮殿遺構の存在が明かとなっている。

遺構　検出した7世紀代の主な遺構は，SD6885の北延長部・南北塀1条・石列抜取り痕2条・石敷・土管を用いた暗渠1条等である。他に10～11世紀の素掘溝1条を検出した。

南北塀SA05はSD6885の西約1ｍの位置で5間分を検出した。柱間は約2.3ｍ等間である。柱掘方は一辺1ｍを越える規模である。SA05は1985年の飛鳥寺西門西側の調査でも検出しており，総延長48ｍで20間以上を検出したことになる。SA05はSD6885の掘方に切られるため，SA05が先行する。また，SA05は飛鳥寺の西面大垣の西11ｍに位置し，いかなる性格の塀であるかは今後の慎重な検討が必要とされる。

石組溝SD6885は幅1ｍ，深さ0.4ｍの石敷をもつ石組溝である。石列抜取り痕SX01・03，石敷SX02・04



飛鳥寺西方遺構配置図

はSD6885と一連の施設であり，飛鳥寺西面大垣とも一体で，大垣から西に向かって自然地形に沿って段々畑状に下がっていく施設の一部である。SD6885の側石も西側の側石の方が東側よりも約0.1m低い。

暗渠SX06は調査区の西端で検出した。土管を組んだ暗渠で，検出した土管は21本，一個の長さ40cm，径20cm，玉縁長15cm，厚さ2cmを測るものである。据付掘方の西肩は調査区外で検出できなかったが，1985年の調査では幅1.5mの規模であった。土管は掘方の東の下端に設置されている。この暗渠は塀に伴うか，石組溝に伴うものであるかは不明である。土管の内側は細かい粘土が堆積するため，早い時期に使用不能になったと推測される。暗渠掘方の暗渠直上部分には流水による堆積が認められ，暗渠以後に開渠として使用された可能性もある。この暗渠掘方は北側60mの1989－3次調査区でも検出しており，総延長100m以上となる。

SD07はSD6885の西に接する素掘の南北溝で，幅3mを測る。この溝からは10～11世紀の土器が出土している。この溝のため，SD6885の西の側石の西側は流水に洗われて石面を現していたこともある。この溝の堆積状況は底部に砂礫層があり，相当の流量があったものと想定できる。

まとめ　飛鳥寺の寺域に西接する地域は奈良県の第11・18次調査（1966・1969）で石敷広場・石組溝等の遺構が広がることが確認されていた。当研究所が1985年に実施した西門の西側の調査では，県の調査で確認した石組遺構以外にも柱穴・素掘溝（暗渠掘方）等の7世紀代の遺構の存在を確認した。今回の調査は，先行する調査で検出した遺構の追認に終わったが，それらの遺構が飛鳥寺の西面大垣と平行して，南北50～100mに及ぶことを確認できたことは，大きな成果であろう。これらの遺構が飛鳥寺と直接に関係するものであるか，あるいは寺を取り巻くように存在する宮殿遺構の一角であるかは今後の調査の進展を待ちたい。

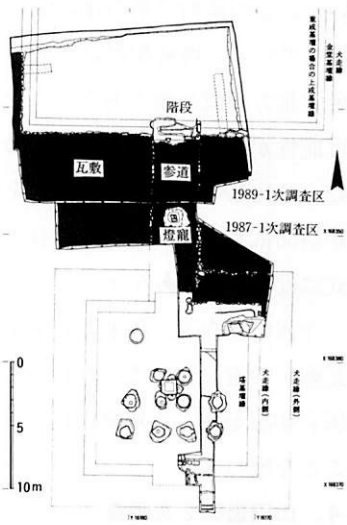
また，かなりの流量があったと推定できる10～11世紀の南北溝の存在は，西方に向かって強い傾斜で落ちていく自然地形に逆らって掘削されたものと考えられ，平城遷都以後の飛鳥寺の存在形態を考える上でも重要な資料を得ることができたものと考えられる。

3．奥山久米寺の調査

この調査は久米寺庫裡の改築に伴う事前調査として行い，調査面積は約250m²である。調査の結果，金堂およびその周辺の状況が判明した。

遺構　金堂は南を正面とする東西棟建物であり，基壇規模は東西23.4m（80尺）に復原でき，南北規模は18m前後と推定できる。基壇の南面階段地覆石の北端が基壇外装の前面より0.6m内側にくい込んでおり，重成基壇の可能性がある。下成基壇の出を0.6mとすれば，上成基壇の東西長は22.2m（75尺）となる。基壇高は現存0.4mであるが，当初は1m以上と推定できる。基壇の周囲には幅約0.7mの犬走りがめぐる。基壇は全面的改修が行われ，創建時の外装をすべて抜き取り，金堂周囲と一連の厚さ約0.3mの整地を行ない，外装・階段・犬走り縁石を据える。整地土には凝灰岩小片が多く入る。基壇外装はすべて抜き取られているが，地覆石に花崗岩切石，羽目石等には凝灰岩切石を用いたと推定される。犬走り縁石には花崗岩自然石を用いてい

るが，改修時のものである。階段の東側および西側５ｍまでは長さ0.6～１ｍの石を，それ以外のところには長さ0.2～0.5ｍの石を並べる。礎石位置は現状では不明である。境内に現存する径1.1ｍほどの円形造りだしを持つ花崗岩製礎石を使用した可能性がある。塔から金堂へ向かう参道に面して階段がつく。階段は幅約3.8ｍ，出は約１ｍである。重成基壇とすれば，上成基壇からの出が約1.6ｍとなる。地覆には花崗岩切石，耳石・段石には凝灰岩切石を用いる。耳石の地覆石３個・段石の地覆石２個を据わった状態で検出したが，いずれも改修時のものである。東南隅の地覆石には円形（径0.1ｍ）と長方形（0.15×0.1ｍ）の枘穴がある。基壇は掘込地業・版築により築成されている。掘込地業は，地覆石の位置までの範囲で，深さは創建時地表面から0.9ｍである。版築は３工程に大別できる。1987年に調査した塔基壇土中には，７世紀前半の瓦が多量に含まれていたが，金堂基壇土中には，ごく少量の時期不明の土器片が含まれるのみである。



奥山久米寺遺構図

参道は塔と金堂をつなぎ，長さ約12ｍ，幅約3.8ｍである。金堂基壇改修時の整地土と一体で造られ，周囲の瓦敷面より約0.1ｍ高い。参道の側石には花崗岩自然石を用い，上面の瓦敷には部分的に上下の２層がある。金堂階段のすぐ南側では，小礫敷を介して上下２層があり，下層は平瓦の凸面を上にして整然と並べ，上層は雑然としている。その他の場所は雑然とした１層のみである。1987年の調査では，参道積土から７世紀後半の土器が出土した。

金堂の周辺は瓦を全面に敷いている。瓦敷は金堂基壇改修時の整地土上に敷かれ，調査区西端から東へ９ｍまでは平瓦の凸面を上にして整然と敷かれるが，他ではかなり雑然と敷かれる。瓦敷の瓦は７世紀前半～７世紀末・８世紀初頭の時期のものが多いが，一部に奈良時代の瓦を含む。瓦敷はおそらく回廊内全面に敷かれていたであろう。

遺物　主要な出土遺物は，瓦・土器・塼仏・金具である。土器類は，ほとんどが近世のものである。塼仏は１点あり，山田寺出土品と同笵である。瓦塼類は多量にあり良好な資料が多い。飛鳥時代から近・現代までの瓦があるが，平安～中世のものはほとんどなく，大部分は７世紀代に属する。出土した古代の瓦の内訳は，大量の丸・平瓦のほか，軒丸瓦175点，軒平瓦64点，熨斗瓦76点，面戸瓦５点，鬼瓦１点等である。

まとめ　飛鳥地域の７世紀代主要寺院の金堂と比較すると，久米寺金堂は基壇規模では山田寺金堂をやや上まわり，川原寺中金堂より小さい。金堂建物の規模は不明であるが，桁行は５間となろう。築造時期は，基壇積土の状況から判断して，７世紀後半建立の塔より遡り，出土瓦からみれば７世紀前半の中頃までさかのぼる可能性が強い。

金堂の基壇は７世紀後半以降に大がかりな改修をうけ，同時に回廊内を整地し参道を設けて

いる。この時期は塔の建設時の可能性が強い。さらに奈良時代には回廊内に瓦を敷き境内を整備している。伽藍配置は，塔・金堂が南北に並ぶ。講堂の位置は石田茂作が推定したように，金堂北方の微高地であろう。したがって，四天王寺式か山田寺式の伽藍配置となるが，前者の可能性が強い。金堂基壇北縁から講堂基壇南縁（推定）までの距離が約25mで，山田寺の約42mに比して狭く，北面回廊を金堂・講堂間に通すにはやや無理がある。また回廊の東西規模が約66mであり，約88mを有す山田寺に比してかなり南北に細長くなり，この点でも四天王寺式に近いものであろう。

今回の調査で，久米寺の金堂は基壇の上半が削られてはいるものの，犬走り・階段・周囲の瓦敷・参道について，きわめて良好な状況で検出できたことは大きな成果である。花崗岩・凝灰岩切石を使った基壇化粧，入念な基壇構築方は，飛鳥諸寺の中でも一級の内容の寺院であることを窺わせる。

4．山田道第2次調査

この調査は県道拡幅の事前調査で，調査は東と西の調査区に分けて行い，調査面積は973m²である。検出した主な遺構は掘立柱建物・掘立柱塀・竪穴住居跡・溝・河川跡・石組暗渠・土坑等である。

弥生時代の遺構　SD2510は調査区東端の7世紀代の整地土下層で検出した幅2m，深さ1.2mの規模で，断面V字形の南で東に彎曲する弧状の南北溝である。東南延長部が第1次調査第Ⅳ区西南隅で確認されている。弥生時代中期後葉の集落の西限を画す環濠であろう。

古墳時代の遺構　SD2570は北西に流れる5世紀後半の小河川で，多量の布留式土器の他に陶質土器・韓式土器・木製鞘などが出土した。

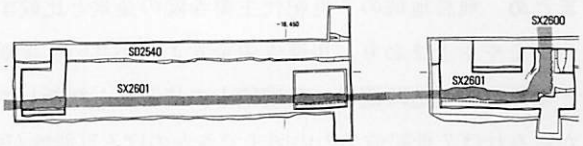
SB2541は2×2間以上の掘立柱建物で，柱掘方が小さく，柱筋は北で西に振れる。他に，SD2570と同じ時期の竪穴住居跡4棟を検出した。

7世紀代の遺構　掘立柱建物・塀・溝・石組暗渠などがある。出土遺物や第1次調査の成果から，7世紀中頃から後半の時期にあたるものと考えられる。

建物SB2501・2502・2506・2518．2520，塀SA2507・2508・2515・2517等は調査区の東端に集中する。ほぼ方眼方位にのるものと北で東にふれるものがある。

SD2524・2525・2530・2539は北で東にふれる南北溝である。掘立柱建物・塀と同じ時期と考えられるが，重複するものもある。

現在の地形でも明白なように，調査地は全体に西に緩く傾斜し，雷丘との間が谷状の地形となっている。東調査区の西部約40m分と西調査区全体（東西75m以上）にわたって，この谷状の地形を埋め立てた大規模

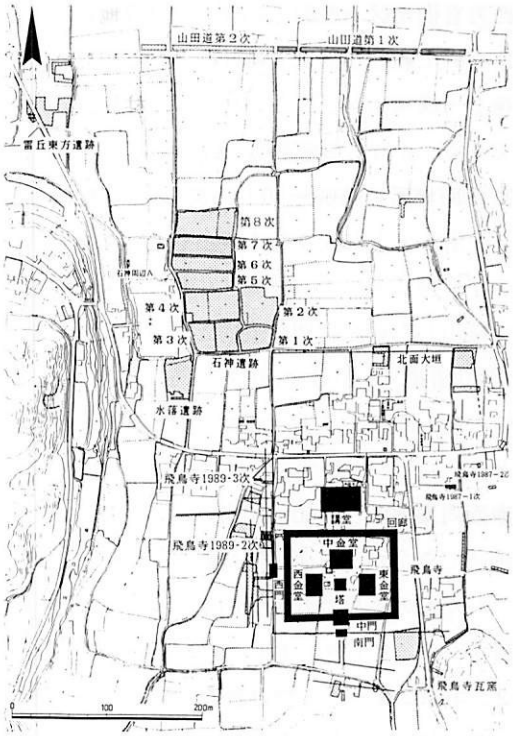


（西調査区）

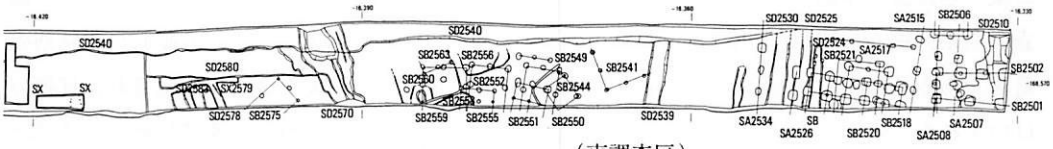
な整地層を検出した。整地は植物繊維を多量に含んだ堆積層の上に行われ，大きく２層に分かれる。下層は粘質土，上層は青灰色の砂である。整地土は厚さ約0.6ｍで，旧地形に沿って北に向かって厚くなる。整地土中には７世紀前半の土器と，小量の瓦を含み，７世紀中ごろの整地と考えられる。また，青灰色の砂層には６世紀代の円筒埴輪の破片が含まれる。この整地土下には２条の石組暗渠がある。２条とも，浅い据え付けの溝を掘った中に（西調査区では緩斜面を水平に削るだけ）作られ，整地土で埋め立てられているため，整地作業と一連の工程で作られたものである。東西方向の石組暗渠 SX2601は幅0.8～１ｍ，東でわずかに北に振れる。石は，拳大から一抱えもある大きさまであって不揃いである。石の積み方はかなり粗雑であり，底石・側石はなく，一定の幅に石を積み上げて，石に隙間を作ることによって水の通り道としたようである。検出した東西方向の長さは約43ｍ以上になる。西へはさらに調査区外に延びるが，東では南北方向の石組暗渠 SX2600に接続する。SX2600は，長さ0.4～0.6ｍの大形の石をたてて側石とし，溝の中に人頭大の石を詰める。幅約0.5ｍで，北でわずかに西に振れる。南北約４ｍ分を検出した。南端の小口には側石を立てていない。石の上面には厚さ10～15cm・幅約1.6ｍの粘土をかぶせて密封するが，SX2601との接続部分ではこの粘土を剝し，SX2600の西側石に榛原石の大形の板石をかぶせている。２条の暗渠は旧地形の傾斜変換線に作られた SX2601が受けた水を，SX2600で北へ排水するものであろう。

東西溝 SD2540は北壁にそって，調査区と平行する溝で，東端では，調査区外にそれる。西調査区で確認した溝幅は約2.5ｍ。調査区東端の掘立柱建物や南北溝より新しく７世紀末頃の土器を含む。７世紀末以降の「山田道」の北側溝の可能性もある。

（立木　修）



飛鳥寺周辺調査位置図（１：8000）



（東調査区）

山田道第２次調査遺構配置図